



鰻塚の前で行われた鰻供養

# 鰻

復刊第二十九・三十  
合併号  
2017年 7月  
身延別院発行  
〒103-0001  
東京都中央区  
日本橋小伝馬町3-2  
Tel 03-3661-3996  
Fax 03-3663-2766

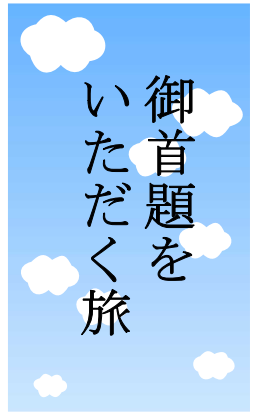
## 鰻供養放生会

### 恒例の鰻供養を奉修

六月三日正午から、今年も恒例の鰻供養が当院で行われ、日本橋蒲焼き商組合の皆さんおよそ二十人が集まって、一緒にお経を上げました。この鰻供養は日本橋界隈の鰻屋店主の皆さんが主催して年に一度、日頃お世話になっている鰻の供養をし、そのあと日本橋川で鰻の放生を行うというものです。

当日は晴天にも恵まれ、高嶋家の駕尾会長さんをはじめ、当院総代を務める伊勢定の富田蓮右衛門さん、喜代川さんなど毎年おなじみの顔ぶれが揃い、皆で鰻魚淡水魚一切の霊の供養をするともに、組合物故者の御霊にご回向しました。その後、境内の鰻塚にて読経唱題の供養をし、組合の皆さんはそのまま日本橋まで出かけ、感謝の念とともに橋から鰻の放生をして、鰻供養を終えました。

当院の境内にある鰻塚は昭和五十八年四月三日、先代の日光上人の時に日本橋蒲焼き商組合によって建立されたものですが、鰻供養はそれより随分前から毎年の行事として行われていました。開催場所も以前は清澄庭園の会館で行われ、供養の法要の後は庭園の池に鰻を放生、その後、芸能人を招いての清興、宴会があり、組合の皆さんが日頃つきあいのある業者の人々を招いての一大イベントでした。鰻塚が当院に建立された時を機に、身延別院での開催となり、今日に至っています。(住職) (七面に続く)



第二十九回 山梨県身延町・感井坊<sup>かんせいぼう</sup>

復興遂げた元禄年間のお坊

私が千葉県から山梨県に仕事で転勤になって、早くも一年十カ月余り。九月一日になればまる二年です。千葉県には日蓮大聖人の生誕された誕生寺(鴨川市)をはじめ、中山法華経寺(市川市)などの大本山があり、山梨県には総



修復された感井坊のお祖師様の坐像

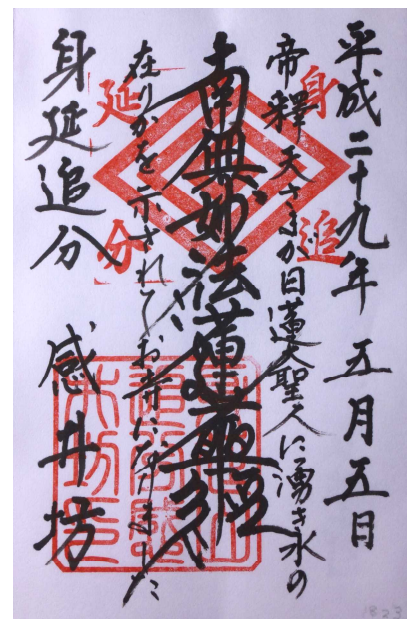
本山・身延山久遠寺があります。日蓮宗のお寺がたくさんある地域で過ごせることは、千か寺参りを続ける私にとって、とても幸運なことと思っています。

一方で、千葉県、山梨県の日蓮宗寺院に共通するのは、無住のお寺がたいへん多いことです。山間地のお寺を訪ねると、本当にそのことを実感します。かつて日蓮大聖人が行き来した土地ですから、お弟子さんも多く、たくさんの方の道場がつくられたのでしょうか。しかし、現在では交通が不便な場所だったり、過疎化で地域に住民がいなくなったりして、お寺が途絶えてしまっているのです。

そんな中、今回ご紹介するのは長らく無住で朽ち果てていたお寺「感井坊」です。感井坊の建立は元禄六年(一六九三年)。日蓮大聖人の弟子、日朗上人の作とされる帝釈天像がまつられています。長い間、無住の状態が荒れ果てていた感井坊ですが、感井坊の管理を引き継いだ身延山清水房の内野光智住職が、この春まで二年の月日をかけて本堂を改修し、お祖師様の坐像を修復したのです。

感井坊は、身延山と七面山を結ぶ参道であり、かつては参拝客でにぎわいました。しかし一九六〇年代に七面山登山口まで車が入れるようになったことや、身延山ロープウェイが開通したことなどによって立ち寄る人が減少。約四〇年前から無住のお寺となり、ふだん管理に立ち寄るお上人もいなくなり荒れ果ててしまったのだそうです。

内野住職は平成二十五年、群馬県に住む感井



坊の元のご住職から「通いながら管理をするのが難しくなった」と相談され、感井坊の住職も兼務することになりました。ほどなく本堂の改修工事に着手し、腐った基礎を取り換えて床を張り替え、参拝客が堂内に上がってお参りできるようにしました。また、宝永六年(一七〇九年)の造立とされるお祖師様の坐像は、指先が破損したり塗装が剥げ落ちたりしていたのですが、昨年四月に身延山大学に依頼して、一年をかけて修復しました。

私は、改修を終えた感井坊の本堂を、内野住職の案内で感井坊を訪ねました。本堂は横に長いお堂です。修復されたお祖師様の坐像は、本堂に立派なものです。現在も無住の状態ですが、土・休日は内野住職が通ったり、友人に依頼したりして本堂を開放し、身延山の参拝客やハイキングの旅行者らが立ち寄っているそうです。平日も、清水房に連絡をすれば開けてもらえます。感井坊の入り口に「笑顔の給仕 心の給水所 身延追分 感井坊」と書かれた木の札が掛けられていました。内野住職のユーモアを感じました。

(平山徹・新聞記者)



# 祈り—副住職活躍中!



## 沖縄戦没者慰霊行脚

六月二十三日、沖縄県糸満市の那覇糸満ロータリーから平和祈念公園までの十二キロを、副住職をはじめとする全国日蓮宗青年会会員約百名が慰霊行脚しました。

沖縄では毎年六月二十三日を沖縄戦争戦没者慰霊の日と定め、戦没者への追悼と平和への祈りを捧げています。日蓮宗では半世紀以上前より遺骨収集を行い、現在では毎年青年僧を中心に慰霊行脚を行っています。平和祈念公園では正午の時報を合図に全員で黙祷を捧げました。炎天下での唱題行脚は過酷ですが、今年も参加者全員が無事に終えることができました。



沖縄戦没者慰霊行脚を行う副住職 (写真上)

平和祈念公園にて黙祷する青年僧たち (写真左)



サイパン・テニアン島戦没者慰霊塔を訪れた一行 (写真上)

慰霊塔前にて行われた法要 (写真左)



## サイパン・テニアン島戦没者慰霊平和宣言法要

三月二十八日、サイパン・テニアン島戦没者慰霊塔にて、副住職が全国日蓮宗青年会会長として、戦没者慰霊塔建立二十周年・戦没者慰霊平和宣言法要を執り行いました。

テニアン島にある慰霊塔は日蓮宗篤信者の小川法子女史によって二十年前に建立され、本年で二十周年を迎えます。その慰霊塔の前で副住職導師のもと、全国日蓮宗青年会会員十六名が戦没者慰霊平和宣言法要を厳修し、立正平和宣言文を読み上げました。

テニアン島は広島、長崎に落とされた原爆を搭載したB29が飛び立った島であり、若き青年僧がこの地を訪れることは、唯一の被爆国である日本の歴史、戦争の歴史を知る重要な機会となりました。





# 被災地・戦地にて鎮魂の

## 東日本大震災第七回忌慰霊法要

五月十一日、宮城県仙台市の日蓮宗本山孝勝寺にて、副住職が全国日蓮宗青年会会長として東日本大震災第七回忌慰霊法要を執り行いました。  
 全国より集まった青年僧三百名は、まず仙台の荒浜海岸を唱題行脚し、会場を移して孝勝寺にて副住職大導師のもと第七回忌慰霊法要を厳修しま



大導師として法要を執り行う副住職

仙台荒浜海岸にて東日本大震災復興祈願行脚 (写真右)

全国より集まった三百人の青年僧たち (写真下左)

日蓮宗本山孝勝寺本堂で営まれた法要の様子 (写真下右)



した。  
 東日本大震災より六年が経ちますが、まだまだ復興に終わりはなく、被災地で苦しんでいる方が沢山いらっしゃいます。法要では多くの亡くなられた方の菩提を弔い、早期復興への御祈願をいたしました。今後も復興支援活動は続きます。





## 寺の動き

### 新年祈祷会に二百五十人

新年祈祷会が一月一日から三日まで開かれました。身延別院の新年最初の行事です。大晦日の午後十一時ごろから参詣者が訪れ始め、ご祈祷は元日午前零時の時報に合わせて始まりました。未明の午前二時過ぎまで続けられ、いったん休みをはさんで、午前八時から再び続けられました。

三日間で訪れた参詣者は約二百五十人に上りました。参詣者には祈願木札、曆、葛菓子が授与され、住職からお屠蘇がふるまわれました。

### 法華経寺・妙法寺へ初詣

身延別院の檀信徒の一行が、一月七日、中山法華経寺荒行堂と堀之内妙法寺を、初詣をかねて参拝しました。参加したのは藤井住職はじめ檀信徒の皆さん計三十六人。一行は午前八時四十分にマイクロバスで当院を出発しました。最初に訪れた法華経寺では、荒行堂の行僧から新春ご祈祷を受けました。続いて市川市の総武霊園を訪れ、当院先師のお墓をお参りました。

総武霊園を出発した一行は午後一時十分に堀之内妙法寺に到着。本堂でお開帳を受けた後、諸堂を案内していただきました。

### 節分会と星祭りに二百人



豆まきには多くの人が集まりました

身延別院の節分会と星祭りが二月三日に行われました。立春を前にした毎年恒例の行事です。

この日午後一時から、本堂で節分会追儼式が行われ、檀信徒百人がご祈祷を受けました。午後一時五十分の豆まきの時間には多くの参詣者が境内に集まりました。年男・年女の檀信徒が、「除災得幸 福は内」と言いながら、本堂から袋詰めにした福豆や福銭を勢いよくまくと、参詣者は夢中になって受け止めていました。豆は六斗五升分を用意しましたが数分間でなくなるなど、今年も盛況でした。

豆まきの後は、豪華景品の当たる福引が本堂で行われました。年男・年女として申込を済ませた檀信徒さんを対象に行っているイベントです。景品は本年も、帝国ホテルペア宿泊券、デジタルカメラなどの豪華なものです。また、鰻の伊勢定お食事券、博多鳥鍋セットなどの景品が総代から提供されました。さらに、高級清酒、写経セットといったお上人からの提供品も並びました。抽選機からの番号が読み上げられるたび、景品を引き当てた檀信徒さんたちからは大きな歓声が上がっていました。

### 豆入れ奉仕に十七人

身延別院の檀信徒有志が一月二十三、二十四日、節分会で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。今年は六斗五升分の豆が用意されました。参加者は、豆を杯で袋に入れる役、袋をホチキスで閉じる役など、役割を分担しながら手際よく作業を進めていました。

節分会は二月三日に盛大に行うことができましたが、それも事前に準備をしてくれる皆様のご協力があるからです。豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、足利洋子、石渡日出子、伊東精子、今井善子、岡本春雄、岡本つね子、奥村雪江、勝見登志子、酒匂三千子、佐竹美智子、鈴木秀子、高橋園枝、寺久保トシ子、中田しづえ、林好江、藤井孝子（敬称略）。ありがとうございました。

## 柴又・題経寺の一行が当院を団参



当院を参拝した柴又・題経寺の皆さん

葛飾区柴又の帝釈天題経寺(住職・望月洋靖上人)の信行会の皆さん十八人が、六月五日、当院を参拝されました。一行は十時半に当院を訪れ、本堂で願満日蓮大菩薩のお開帳を受け、身延別院の縁起などのお話を聞きました。

## 鰻供養放生会

当院において毎年日本橋蒲焼き商組合の主催で鰻魚供養が行われています。これは日頃私たち人間が私たちの身体を維持し養うために、鰻魚類の命をいただいているところから、感謝と懺悔の心から行う法会です。

放生会の起源は古く、大乘經典、『金光明

経』の「流水長者品」に基づくとされています。同経には、仏が前生で流水という名の長者であった時、池の水が涸れかけて魚類が瀕死の際にあったのを見て、長者は何頭もの象で水を運んでその急を助け、飲食を与えて、さらに深妙の法を説きました。すると、その魚たちは聞法の功德によって忉利天の世界に生まれ変わった、とあります。

中国の天台宗の大成者智顛(五三八・五九七)は、天台山に隠棲中、四十から四十六歳くらいの間に、麓の漁民たちが捕った魚を金銭で購入して放生してやり、さらに陳の宣帝の協力を得て付近一帯に放生池を設けて放生令を出させたりしたといえます。これが中国での具体的放生の記録で、放生池の設置は天台智顛に始まるといわれています。



本堂で行われた鰻供養法要

## 今後の予定

- 七月 六日(木) 富士山経ヶ岳参拝
- 十六日(日) 盂蘭盆会施餓鬼法要  
午後一時より
- 二十日(木) 怪談く伝馬町僧侶語り  
午後七時半より
- 参加費 金二五〇〇円
- 八月 一日(火) 願満祖師終日お開帳
- 五日(土) 大黒天祭礼 午後二時より
- 九月 一日(金) 願満祖師終日お開帳
- 十七日(日) く二十三日(土) 秋季彼岸会  
二十三日(土) 彼岸会施餓鬼法要  
午後一時より
- 十月 一日(日) 願満祖師終日お開帳
- 二十日(金)、二十一日(土)  
お会式花作り
- 十一月 一日(水) 願満祖師終日お開帳
- 三日(金) 身延別院お会式法要  
午後一時より

## 編集後記

今号の『願満』は、諸事多端のため二十九・三十号の合併になりました。次回は十二月の刊行予定です。住職は今年四月より、現在勤務する大学院大学の学長に就任したため、留守が増えるかもしれませんが、どうかご了承をお願い申し上げます。(住)





## 劫初の時の人間世界



今から千六百年も昔のインドで成立した『俱舍論』(アビダルマ・コーシヤ)という仏教論書がある。世親(ヴァスバンドウ)が当時の仏教部派説一切有部の教理の綱要書を要領よくまとめたものだ。これは中国で、真諦三藏(四九九・五六九)と玄奘三藏(六〇二・六六四)によって二回漢訳され、中国でこの論書を中心に研究する俱舍宗という学派ができ、やがて我が国にも伝わって南都六宗の一つとなった。

この『俱舍論』は玄奘訳では三十巻あり、九章から成っている。その第三章の「分別世品」に、この世界が成立したときの人間の状態が説かれているので紹介しよう。以下は古代インドの仏教者たちが考えたことである。

我々の世界は破壊期、空漠期、生成期、維持期の四期を一サイクルとして破壊と生成を繰り返すというが、世界が生成され、維持期に入った時の世界では、人々の身体は天人のようであったという。肢体円満で欠けることなく、身体は光明を帯び、自由自在に空を飛翔できた。人々は喜びと楽しみとを食物として摂り、長寿であった。

ところが、地上に「地味」(プリーティヴィー・ラサ)と呼ばれる物が生えてきた。その味は甘美で、馥郁とした香りがあった。ある一人が、その美味しそうな香りに誘われて取って食べた。すると他の人もそれにならい、やがて皆が争って食べるようになった。このときが、人間が普通の食べ物を摂るようになった始めである。

このような普通の食べ物を摂るようになると、人間の体は徐々に重くなって、やがて体から光明が失せ、世界に闇黒が生じた。太陽、月、星々がこのときから生じた。

やがて地味が食べ尽くされると、今度は地皮餅ちひべいといわれるものが生えてきた。人間は、これも争うようにして皆食べ尽くした。

すると今度はブドウのような蔓草が生えてきた。これも皆、食べ尽くした。その後で、種まきもしないのに生えてきたのが香稻(シヤール)である。人間は、この稻を食物に充てたが、この稻は以前の食べ物とは違って粗雑なものだったので、残滓を排出する必要が生じ、それで人間の体に大小便道の二道ができた。そしてその時に男・女根が生じ、身体も男女の別が生じ、そこで姪欲が生じ、男女の交わりが始まった。このとき初めて人間の心の中に愛欲(カーマ)が生じたという。

この間、人間は好きなきに必要なだけ稻を採って食べていたが、ある怠惰な一人が多く収穫し蓄えて、その都度採取しなくていいようにした。すると他の人もこれを真似て、皆一度に多く採り、蓄えるようになった。このとき、人間の心にはじめて「我が物」という觀念が生じるようになった。

皆が採った所は二度と稻が生えてこなくなったので、人々は自分の収穫する領分としての「田」を分かち、自分の田についてはこれを護り、他人の田に対してはそれを掠奪しようとする気持ちが生じた。人間の中にこの時から強盗という過が発生した。

すると、自分の田を強盗から守るために、人々は自分の田からの収穫の六分の一を出して、一人の有徳の士を雇って田主とし、皆の田を護らせた。これがクシャトリアの名の起こりで、また国王の始めである。

また、人々の中には家を出て、静処において修行を積む者もいた。これがバラモンの起こりである。

後になって、国王の中には食欲な者も出て、人々に等しく分配できなくなった王もいた。貧しい人々は犯罪を行う者が多くなったので、国王はこれを禁止するために刑罰を決めた。これによって人が人を殺害するという事が始まった。また、罪人は刑罰を恐れたために、事実とは異なることを言うようになった。これが人間の嘘の始まりである、と。

(住職)